

赤毛の末裔少女

ココスケ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

霧隠れの里で突然目を覚ました少女。

名はうずまきレナ、転生者である。

色々とカオスな状況で原作知識がポンコツになった上、私は死亡フラグ建設中の人柱力!?

が、木遁とゴキブリ並の生命力と母親の遺品である大鎌を手にとるか生きて…行けたらいいなあ…。

目次

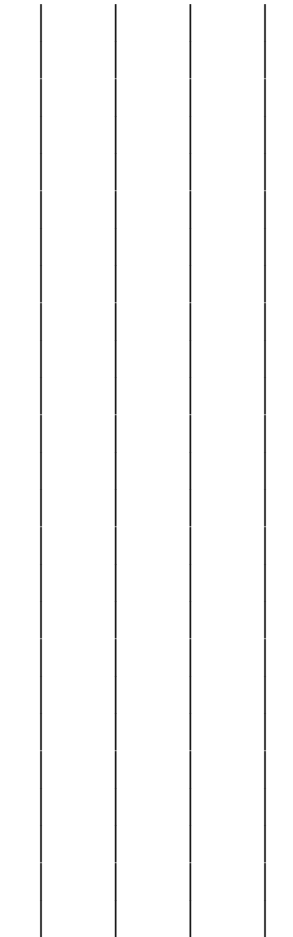
第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
67	64	62	59	55	53	51	48	45	42	39	36	32	30	28	25	22	19	16	14	11	8	5	1

第
28
話

第
27
話

第
26
話

第
25
話



79

75

72

70

第1話

上を向いて見ましょう。

リンゴ、ブドウ、梨、栗、イチゴなどといった果物オールスターズ的なカオスな木がありますね。

(イチゴは野菜なのは突っ込んでではならぬ)

下を向いてみましょう。

推定年齢3歳のまだモチモチと柔らかい体つきと、ふわふわとしたした赤毛がキュートですね。

…あれ？

トラツクに轢かれ、恐らくミンチになったであろう体は確実に現代の医療では治せない事は分かる。

そして、三途の川ならぬ真つ黒なトンネルを通ったらここに居た。

…転生？流行りから少し遅れた、トラツク転生ってやつ？

それに、ここが明らか地球じゃない事はわかる。…こんな木があれば、大ニユースだ。

そして、髪の色。

トマト、血、イチゴ…色々例えようはあるけれど、ここまで鮮やかな赤い髪は、染髪しないと出ない気がする。

赤毛のアン？アンなの？

ここはだれ？私はどこ？

『お前はうずまきレナだろ？てか、アンって誰だよ…』

ふあっ!?

まあ、なんと言うことでしょう…。

一瞬で視界が変わり、水の上に立つ不思議空間に変わった。

そして、目の前には世にも珍しい喋るカブトムシ(大)が…

「…シャベツタアアア!!」

『うおっ！びっくりした…』

うずまきレナ(仮)は 混乱 している！

〜10分後〜

「つまり、うずまき一族の両親がうずまき隠れの里から大移動して霧

隠れに。

元々七尾重明の人柱力であった母が出産に耐えきれず死亡、その際に引き抜かれて私に封印して見守ってきたって事でいいの?」

『ああ。お前の母に頼まれたからな。つても、精神が変わる前のお前は幼すぎて精神世界へは来れなかったがな。』

お前の父親は任務なうだ。

んで、精神の質が急に変わって混乱の最中だったから色々教えてやろうと思っただけな。』

どうやら、ここはNARUTOの世界で間違いないようだった。

私はうずまき一族の生まれで人柱力：

「…って、霧隠れって血霧の里!？」

恐怖政治や血継限界嫌いの霧隠れ!？」

『ん?そんな事聞いたことねえぞ?』

3代目水影はジジイで割とのほほんとしてるし…圧政なんかしてねえぞ?』

それに、別に血継限界でどうのこうのとかは聞かねえな。』

「あ、3代目…つまり、原作開始よりかなり前か?』

ねえ、私って同世代の友達っていなかったの?」

『うーん…白ってやつが近所に住んでる。』

「…白ってナルトと対して変わらなかったはず…。ねえ、それじゃあ

…霧隠れには三尾と六尾がいたでしょ?』

今誰に封印されてるの?」

『ん?んー…ちよつと待ってろ…。』

ああ、両方ともお前と同じくらいのガキに封印されてるぞ。名前は…やぐらと、ウタカタだ。

どっちも、お前の父親が封印を担当してる。』

「…ん?」

白Ⅱナルト世代

ウタカタⅡ20代

やぐらⅡ?』

「計算合わねえ…つまり、どういふことだっただよ…。』

じゃあ、九尾の人柱力は？男？女？」

『お前と同じくらいの男のクソガキと女の両方に分けて入れられる。』

『多分親戚だろ。なんかチャクラの感じが似てるし。』

「…ん？あれ？…まさか、両方生きてる…？ってことは…ミナトも？ナルト世代にウタカタとやぐらがいるのか…。」

これは…原作知識がいきなりポンコツに…。

まあ、うずまき一族に重明が封印されている時点で崩れてるが。

生命力がゴキブリ並だと微妙な例えをされるうずまき一族な事に喜ぶべきか。

死亡フラグ乱立の人柱力である事に悲しむべきか。

『もしもなんかあれば、音速で飛んでトンスラすればいい。そう落ち込むな。』

「あなた…いい人…じゃなくなって、いい尾獣ね。」

まあ、原作のフウちゃんは警戒心無すぎやられちゃった訳だし…空を飛べるって大きいよね。

明日から特訓しないとね…。」

『そうだな。封印術に関しては父親とか巻物とかあるからいいが、問題は木遁だな…あんま文献載ってねえし。』

「は!?!木遁!?!」

『ああ、外の木になんか色々成ってたろ？』

あれ、お前がやったの。そんな時に食いたいもん好きだけ付けるから…ああなった。』

「血継限界じゃないっすかーしかも無駄遣いエ…てか、私はうずまき一族だよな？木遁って千手の血継限界じゃなかった？」

『んー千手と遠縁関係だからじゃね？って父親は言ってたぞ。』

「ノリ軽いな!?!…でも木遁は…アタリ？」

『なんだよ、そのくじを引く感覚…てか、血継限界持つてる時点でアタリだろ!?!』

「いや、うん…でも、血継限界の中でも強い方な感じがする。食糧が無くなつて餓死つて事も無いだろうし。」

『さつき無駄遣いがどうのこうのって…まあ、いいや。説明しすぎて
疲れたからそろそろ俺は寝る。』

「なんか有ったら呼べ。』

「うん。ありがとう、重明。」

第2話

現実に戻ってきた私は、羽根を出して空を飛ぶ練習を始めた。

「うう…怖っ…よくフウちゃんは飛べてたな…。」

精神面以外には問題ない。

…その精神面が大問題なのだが。

「あ、リングゴ…」

うん、休憩だ。

私はリングゴを取って休もうとした。

そして、気を抜きすぎたのがいけなかったのだろう。

羽根が消えてしまい、地面へと真っ逆さま。

「うわっ!？」

来たる衝撃に目を瞑るが、いつまでたっても来ない。

目を開ければ柔らかい…砂?のような物に包まれていた。

「…これ…鱗粉?」

砂よりも柔らかいし、キラキラしてる。

確か原作でも、フウちゃんは鱗粉を使った攻撃をしていた。

しかし…こんな、我愛羅よろしくオート防御を使っていただろうか

?

…我愛羅と同じ能力か?

我愛羅も母が人柱力だったが、自身が産まれて人柱力になった際に亡くなっている。

その母の「守る」という気持ち的な物?で、砂の絶対防御が現れるようになった。

試しに鱗粉を出して動かしてみた。

…うん、思い通りに動くな。

防御力は…鱗粉に期待して良いものなのだろうか?

砂も似たようなものだから気にしたら負けか。

まあ、忍者と言う名の魔法使いが闊歩してる世界だしな。

…取り敢えずリングゴ食べよ。

前世に1度食べた事のある、箱に入った高級リンゴよりも美味しいリンゴを食べ終わり鱗粉の可能性を調べる。

どこからか鱗粉がやってきているため、我愛羅の砂のように持ち運びは要らないらしい。

…あれ、地味に重そうだったから安心した。

出せる鱗粉の量に制限無し。

出した鱗粉は、消すことが出来る。

物理法則に真正面から喧嘩売りに行った能力だ。…こんなのがうじゃうじゃしてやがるナルトの世界って自然環境は大丈夫なのだろうか…。

次に私は、落ちていた木の枝を尖らせて、思いっきり足に突き刺さうとした。

だが、鱗粉の盾に阻まれる。

…やっぱオートか。

だが、中忍試験の我愛羅VSリーの時みたいに、鱗粉に頼りっぱなしになればフルボッコになるかもしれない。

…困った時は木遁だ。

組み合わせると…うん、大丈夫だ。

何がどう大丈夫なのかは分からないが。

「木遁・野菜いっぱいの術〜！」

自分の中の何かが一減りだけ減ったと思ったら、ピーマン、人参、ジャガイモ、カボチャ、スイカなど、これまた季節感の無さが目立つ畑が出来上がった。

「木遁・収穫手伝いロボット君の術〜！」

木で出来た人形たちが10体ほど出てきて野菜の収穫を行っていく。

『お前…その術名どうにかならんのか?』

「いや、だって…ねえ？戦闘が無い内は、なんか便利な術としか考えられないし…。」

『言いたい事は分かるが…』

私のチャクラで作る野菜や果物は美味しい。

リンゴの次にイチゴを食べてみると、これまた甘酸っぱいバランスが良く、その場で悶えてしまった程の味だ。

恐らく、元々生命力とチャクラの多いうずまき一族だと言うことと、重明の人柱力でチャクラの多さに磨きがかかっている為、かなりのチャクラの濃さになっているからだろう。

ならば、近所に住んでる白や、同じ人柱力らしいやぐらやウタカタに配ろう。

原作キャラのシヨタ時代は今しか見れないのだ。

野菜の収穫は終わったようだ。

私は人形たちに別れを告げて野菜を冷蔵庫へ入れるため、キッチンへと向かった。

第3話

「これで、最後つと…」

ようやく冷蔵庫に野菜を詰め終わり、ふと家の中を見渡してみる。
(NARUTOの世界の文化って現代日本並にカオスだよな…)

和洋中全てを混ぜこぜにしてしまった感じだ。

「あ、写真がある…」

何個かの写真立てには、赤い髪をした男女の写真や、男性と小さな女の子の写真、2人の赤い髪をした女の子の写真…

両親、父と私、次は…?

いや、母の幼い頃の写真だと言うことは分かる。

問題は、その横の女の子だ。

(どこかで見たような…)

「あっ！クシナだ…！」

精神世界でナルトと会ったときは、大人の姿だったから気付かなかったが、クシナの幼少期か…。

「ねえ、重明、お母さんとクシナって知り合い？」

『いや、知り合いも何も…姉妹だぞ？』

「…ん？」

『姉妹だ。』

「ナ、ナンダッテー！」

え、じゃあ、ナルトとは従兄弟？え？マジ？」

『…え？九尾の人柱力と従兄弟？』

2人は 混乱 している !

「…うん…オリキヤラ転生って奴ですね、分かります。」

『何がだよ…』

「それにしても…お母さん、美人さんだなく」

『当然だろ？』

…それに、お前は生き写しのようにそっくりだぞ？」

「な、なぬ!?今すぐ確認じゃ〜！」

あんな美人さんとそっくりだとは…そんな事…

「あつた…。」

写真でみたお母さんを幼くした感じだ。

金色？のぼつちりとした目に、丁度いい高さの鼻、小さめの唇、長い睫毛、赤い髪。

…クルクルと巻いたようになってるのはお父さん似かな？

…なるほど、確かに生き写しだ。

自分で言うのもなんだが、可愛い。

「ただ今〜」

「…！お父さん、おかえりなさい！」

レナには、お父さん以外の家族はいない。

スグに声の主を特定したレナは、玄関へと向かった。

「お父さん、お疲れ様。」

「ああ、ありがとう。」

父は、手で頭を撫でてから父の部屋へと向かう。

(ねえ、お父さんって中忍？)

『いや、上忍だ。』

それにしても…中忍ベストとか額あてとか…なんか、こう…生で見ると、なんとも言えない感動がある。

そんな事を考えている間に、お父さんが手を洗ってキッチンに向かった。

「ぬおっ!？」

お父さんの驚いた声と、何かが崩れて落ちていく音。

「お、お父さん…大丈夫？」

「ごめんね、詰めすぎちゃった…」

「う、うん…。大丈夫だよ。」

少しびっくりしただけだ。…それにしても、これ…全部作ったのか？

「うん！」

「…これまた…季節感が無い…まあ、食べきれない物はご近所に配るか。」

「封印術？」

「…だめ？」

夕飯を終わらせて、寛いでいる父に封印術を教えて欲しいとお願いした。

特に、クシナが九尾を抑え込むのに使っていた鎖。九尾でさえ、足止め出来る封印術であれば…大抵の物は抑え込む事が出来る。

「構わないけれど…急に…どうしたんだい？」

「いつか役に立つかと思って。」

「まあ、確かにそうだね。」

よし、まずは…封印術を教える前に、巻物での座学だ。」

「はいっ！」

第4話

金剛封鎖。

それは、背中から無数の鎖を出して相手を縛り付ける技。座学も終わり、いざ実践となったのはこの世界で目覚めて1週間後の事だった。

「金剛封鎖っ！」

チャクラを練って私が出した鎖は、木遁で作った的を庭に縫い付ける。

鎖は鱗粉と同じく自由に動かせるようだ。

「初めてでこんなにも上手く封印術を使えるようになるとはね…。今の感じを忘れないように。」

「はい！ありがとうございます。」

「うん、いい子だ。」

いい子いい子と優しく頭を撫でてくれるお父さんは、任務で忙しくとも私を可愛がってくれる。

「じゃあ、僕はそろそろ任務に行かないと…」

タダの子煩惱な父親にしか見えないが、霧隠れの上忍。

あまり、多くの時間は取れないでいる。

一応、有名な忍なのだが…

『外では…紅い疾風って呼ばれてるんだぜ、嘘みたいだろ？』

多重人格だと言われても納得出来る。』

「お父さん、頑張ってるね！」

「ああ。いい子にして待ってるね。」

…この1週間で、お父さんの実力も、優しさも知った。だから、大丈夫。お父さんなら、無事に戻ってくる。

「あとは豚肉〜。」

『卵もな。』

「あ、そっか。」

商店街で買い物をする、微笑ましい物を見る目で見られ、時々お菓子をくれる人もいる。…子供って得だ。

私の肩にはチビサイズの重明が乗っており、私のボディガードをしている。

「これで、終わり…かな？」

『レナ、早く帰ろうぜ…。』

「うん。」

途中、男の子の集団に囲まれてもみくちゃにされた重明は、げっそりとしている。

「重明、お疲れ様。…今日はアップルパイを作ってあげる。」

『…マジ!?早く帰ろうぜっ!』

「遅いね…ご飯冷めちゃった…」

『アップルパイも俺が全部食べたしな。』

…それにしても、なんか嫌な感じがする。何も…無ければいいんだが。』

「お父さんは強いもん…何も無いに決まってる…」

口ではそう言っているが…不安な事には変わらない。

お父さんがこんなにも遅くなる事は、1週間の間無かった事だから。

「…修行でもしようかな。」

思い立ったらスグに実行。

座っていた椅子から立ち上がり、庭の方へ向かおうとすると…

コンコンッ

「はーい…どちら様ですか？」

「…先生…うずまきヤシロの部下です。」

『父親は…確か、下忍を受け持っていたな…。』

「今開けます。」

「あつ…娘さん…ですか？」

「…父に何かありましたか？」

ドアを開けると、怪我を負った部下達がいたが、父の姿は見当たらない。

そして、部下達の泣き腫らした目や掠れた声が私の不安を掻き立てる。

「…うずまきヤシロさんは…お亡くなりになりました。」
私の中で、何かが弾ける音がした。

第5話

それから半年の事は、記憶にボヤがかかった様にあまり覚えていない。

ただ、修行にのめり込み、引き取ると言ってくれた水影さまの申し出を断わり、孤児の為の支給金を貰って生活していた。

「なんか…野菜しか食べてないからお金が貯まるな…」

『そりゃあ、食費が殆どかかってねえしな。…特に、この半年は買い物する間も惜しんで修行に明け暮れて水影が心配してたぞ。』

この半年、度々訪ねて来ていた水影さま。

何かに取り憑かれたように修行する私を、泣きそうな目で見ていた事は覚えている。

「まあ、そのお陰で家にある巻物の術は全部覚えた。

次は…螺旋丸か飛雷神かな？やっぱあると便利そうだし。」

『お前…昨日徹夜で幻術無効のお守りと無限収納作ってたろ？』

いいかげん少し休め。』

「でも、趣味みたいなものだし…」

『いいから休め。尾獣命令だ。』

「分かった…」

私は、あのカオスな木の下に座り、鱗粉で梨を取った。

「ん、やっぱり美味しいね。」

一口含むと、水分と共に爽やかな香りが鼻に抜ける。

シヤリシヤリとした果肉も楽しく、自覚が無いうちに疲れて余計な力が入っていた体から力が抜けていく。

「レナちゃん、此処にいたのか。」

話しかけてきたのは、3代目水影様。

水影の衣装を来て、ゆったりとした動きで私の方へとやって来た。

…後ろに誰かいるのが気になるが。

背丈や足の細さからして子供が2人だろうか…。

「水影さま、お久しぶりです。」

と言っても、1週間程だが。

「ああ、久しぶりだね。」

…今日は、お友達を連れてきたんだ。ほら、出ておいで？」

水影さまの後ろから出てきたのは、私と同じ歳頃の男の子2人。

1人は水色の着物を着た切れ長の目をした長い茶髪の男の子。

もう1人は、アツシユの髪と紫の目、左目下の傷が特徴の背が小さい男の子。

…ウタカタと、やぐらだ。

「ウタカタです。」

「…やぐらだ。」

「うずまきレナです。」

「では、儂は執務があるでな。3人、仲良くな。」

そう言い残し、水影さまは立ち去った。

「……………」

『お前ら…全員人見知りってどういうことだ。』

重明からツツコミが入るが、私達は喋れないでいる。

いや、硬直していると言った方が正しいだろう。

『あ、全員コミュ障だ。だめだこいつら…。』

「…リンゴ、食べる？」

「食べる。」

「うん。」

私は羽根を広げ、リンゴの収穫へと向かった。

このリンゴを食べた2人が人が変わったように喋るようになり重明から驚かれたことから、この日の出来事はリンゴ事件と言われている。

第6話

「木遁・野菜いっぱいの術」

私の言葉と共に、ランダムに野菜が出てきた。

あのリング事件から1ヶ月。

すっかり仲良くなった私達は、色々話をしようになった。

2人とも親が亡くなってやぐらとウタカタの二人で暮らしており、野菜や果物などを共有している事も要因の一つだろうが。

「…レナって…うずまき一族だよね？」

なにか思いつめた様な顔をして、2人が話しかけてきた。

「…？うん、そうだよ？」

「お願いがあるんだ。」

「俺からも頼みがある。」

2人からの頼み。

それは、尾獣達の封印の鍵を解き、鎖から解放して欲しいとの事だった。

私達の出会いから1ヶ月。

私と重明の友達とも言える関係に感化され、精神世界での会話を試みたらしい。

最初は相手にされなくとも、粘り強く隣に居座り続けた。

そして、2人とも尾獣と友達になった。

だから、鎖を解き、尾獣達の苦しみを解き放ちたい。

そして、尾獣達も全力で力になりたい。

だが、うずまき一族特製の高度な封印術はうずまき一族にしか解けないだろう。

私は話を聞き、早速封印を解くために2人の精神世界へと入って行った。

「精神世界」

「ここをこうして…ていつ！」

私の掛け声と共に、バチツと音がして2体の封印の鎖が解けていった。

「さすがお父さんね…頑丈な造り…」

『それを解除出来るお前もやべえよ。』

「うずまき一族なら当然でしょ？」

封印術は得意なんだから。」

『いや、この封印術はお前の父親が何年も修行を重ねて腕をあげた物だ。』

タダでさえ封印術は掛けることよりも解く方が難しい。…お前は修行を開始して半年だぞ？

普通、封印解除が出来るようになるまで早くとも数年はかかる。』

「へへレナって凄いな！」

レナ、ありがとう…封印を解いてくれて。」

「そうだな…助かった。」

…シヨタ時代の2人に褒められると、悪い気はしない。

イケメンの無駄遣いとはこの事だ。

『レナちゃん、僕からもありがとう。』

『僕からも礼を言おう。』

「これ位…どうって事は無いよ？」

特に、シヨタつ子の笑顔を守るためには。

夕方になり、2人も帰路に着いた頃。

カンツカンツと、うずまき邸の庭から音が響いていた。

レナが修行をする時とは違い、その場には隠しきれない殺気と共に重苦しい空気が流れていた。

(重明が助けを連れて帰って来るまで…何とか持ちこたえないと…)

暗殺者と思わしき5人は、暗部の服を着用し、面を付けていた。

あの水影さまが私を暗殺する命令を出すとは思えない。…つまり、この人達の独断行動だろう。

暗殺者に対して善戦してはいるが…レナが暗部所属の5名を相手取るには、あまりにも経験値が足りなかった。

鱗粉のオート絶対防御が無ければ、とつくに死んでいるだろう。

木遁、封印術、鱗粉…攻撃法は沢山あるが、殺気に震え上がっている私の攻撃に精鋭と呼ばれる者達が当たるとは思えなかった。

耐えろ。たえろ。タエロ。

第7話

「水遁・水龍彈の術！」

「今の内だっ！全員、縄にかけろ！」

…助けがきた…。

水影様が放った水龍彈の術での牽制で暗殺者たちの動きが止まった隙に、忍達は縄に掛けていった。

安心して腰が抜けてしまった私は、その場に座り込んだ。

「レナ…すまんなんだ…。儂が部下の危険因子を把握出来て居れば…」

「大丈夫です。水影さまのせいではありません。怪我もありませんし。」

「…そうか…しかし、儂の責任が重いことも事実…」

水影さまは、どう償えばいいか考えているような顔だ。

「水影さまっ！この者達は…」

「…部下が呼んでいる。また、来るでな。」

「ねえ、重明…これって…」

父が亡くなつてから手付かずになっていた倉庫を整理していると、目に付いたソレを出す。

『ん？ああ…それはお前の母さんが愛用してた武器だ。』

それを持つた美しい姿は、忍界の死神と呼ばれる程だった。』

私の手には、所詮大鎌と言われる武器が握られていた。

刃は勿論、柄まで全てが金属で出来ており、本来ならばかなりの重さになる筈のそれは特殊な術が掛けられており、うずまき一族が手にした場合のみ重さが無効になり、手入れが要らぬよう、状態保存の術式も一緒に掛けられていた。

刃の付け根部分には、うずまき一族の家紋があり、全体的に赤みがかつた色は、うずまき一族の髪色を連想させた。

「そもそも…大鎌って、農具だし武器として使いにくそうないメージがある…。」

中二病みたいだし。」

『中二病ってのは良く分かんが…確かに、初心者向けの武器では無いが達人になれば普通の忍刀よりも軌道が読みにくい分相手からすればやりづれえ。』

しかも、空から飛切っつー技を出せればさらにやりずらくなる。

まあ、今のところお前しか持てるやついねえし…やるだけやってみれば？

普段は呪印にしまっておけるし。

持っただけでも威圧感やべえし。』

「…そうね。」

私の心の中には、暗殺者の殺気に当てられ何も出来なかった日の事が浮かんだ。

あの日の二の舞には…なりたくない。

その日から、私はお母さんの遺品である大鎌を使いこなす為の猛特訓を始めた。

「2人とも、一緒にクラスになれたらいいねっ。」

「ああ。」

「…ん。」

私達が6歳になり、アカデミーへの初登校の日。

見事に人見知りの気を発揮させている2人を見て苦笑する。

幼なじみとして、同じ孤児として。

当然の如く一緒に登校する姿は、何も知らなければ微笑ましいものであったが、少しでも事情を知っていれば微笑ましくもあり、痛ましくも感じる物であった。

「立派な忍になれるよう—」

どうして偉い人の話はこんなにも長いのか。

(こんな所での共通点はいらん…。)

そこは簡素にして欲しい。

眠気を抑えつつ、ありがたのお話を右から左へ流していく。

偉い人の話とは、聞き流される運命にあるのだ。

第8話

「水遁・水鏡の術！」

私とやぐらの声が庭に響くと、私達の前に水鏡が現れる。

やぐらの方は、私の物よりもかなり大きい。

(やはり…本家…)

水鏡の術は、原作でもやぐらが使用していた。

やぐらの中にいる磯撫の力もあり水遁が得意なやぐらと、木遁を主に使用している私の差がハッキリ出ている。

…因みにウタカタは近くに座ってナシを食べながら見学している。

—アカデミーに入り数年が経った。

アカデミーでは、人柱力達が全員満点で3位までを独占するという事態が発生していた。

思った以上に退屈な授業では、身になる筈も無く…3人で鬱憤を晴らすかの様に修行を行っていた。

アカデミー入学の際に祝として水影様から渡されたのはやぐらが緑の花が付いた黒い棍棒と、ウタカタがチャクラでシャボン玉が出る管である。

どちらも原作でも持っていた物だ。

私には髪をくくる白いリボンと赤いうさぎのぬいぐるみをくれた。

…女の子らしくしろという事だろうか？

まあ、有難く使わせて貰っているが。

それから、3人お揃いのネックレス。

それぞれ「3」、「6」、「7」の刻印が入った物だ。

ついでに私が封印術を応用し、改良した「幻術無効」の効果を入れておいた。

人柱力である私達が写輪眼などにより尾獣もろとも幻術にかかれば、霧隠れに甚大な被害がでる。

そうなれば、九尾の人柱力であるナルトがされたように、迫害が始まるかもしれない。

人柱力全員がナルトの様な鋼メンタルな人間ばかりでは無い。少なくとも、私達がナルトの様に迫害されると…最悪誰かが里抜けする可能性もある。

出来る限り幼なじみの死亡フラグを回避する為に、出来ることをしておかなければという気持ち半分、血霧の里と呼ばれる未来を回避したいという気持ち半分だ。

クルンと跳ねがちな髪を白いリボンで後ろにまとめ、写真が立てられている棚の方へ向かう。

「お父さん、お母さん、行ってきます。」

返事が無いのは分かっているけど、毎朝の習慣として続いている。忘れ物が無いかももう1度確認し、鍵を閉めて家を出る。

「ウタカタ、やぐら、おはよう。」

「おはよう…」

「おはよう。」

途中で見つけた2人と合流し、アカデミーへと向かう。

3人は12歳になり…今日、アカデミー卒業試験を受ける。

「えー試験内容は、分身の術を行うこと。名前を呼ばれた順に隣の部屋にこい。」

そこは木の葉と一緒になのかと思いつつ、最初に名前を呼ばれたレナは隣の部屋に向かった。

「分身の術！」

煙と共に出てきた、私そっくりの分身。

教師は満足そうに頷き、私に新品の額宛を渡した。

「おめでとう。」

「ありがとうございます。」

私が作ったのは鱗粉分身だ。

どこからともなく現れ、消える謎の物体。

これまで、謎を説明しようとして頑張ってみたが…もう「こういうものだから」としか言えない。

好きな様に動かそうとチャクラは減らず、オートで絶対防御を作り出すなど、プラスにはなってもマイナスにはならない為、放置している。

私の試験が終わってから生徒の名前は呼ばれ続け、アカデミーを出る時はウタカタとやぐらも額宛を付けていた。

第9話

アカデミー卒業試験を終え、班分けの日。
これから下忍になれる。

やぐらも、ウタカタも、私も合格し、それぞれの尾獣を肩に乗せて
担当上忍が来るのを待っていた。

私達は、人柱力だ。

人柱力は色々と狙われる事も多々ある為、班員も担当上忍も厳正に
選ばなければならない。

3人別々にするよりは、1組にまとめておくほうが実力者たちが全
員担当上忍となってしまうという事態も避けられる。

「次、第9班！ウタカタ、やぐら、うずまきレナ。担当上忍は…干柿鬼
鯨。」

「取り敢えず…自己紹介をしてもらいましょうか。」

私の名は干柿鬼鯨。好きなものも嫌いなものも特になし。」

「…ウタカタ。」

「やぐら。」

「うずまきレナ。」

「…合格です。忍たるもの、他人に無駄な情報は与えるべからず。私
達はこれから鬼鯨班として任務を行います。

ですから、これから知っていけばいい。

そして、これから実力テストを行います。

では、ウタカタから順に。」

「…はい。」

開始の合図が鳴ると、ウタカタは先手必勝と言わんばかりに勢いよ
く泡を出して地面の草を枯らしていき、地面までボロボロにしてい
く。

が、当然鬼鮫は後ろへ飛んで避ける。

「当たれば…タダではすみませんね。」

…当たれば、ですが。」

「当たらないなら、当たるよう餌を与えればいい。」

「なっ…！」

先ほど地面の草を枯らした泡。

それとは別に肩に乗ったウタカタの尾獣、犀犬が無色透明のガスを出していた。

犀犬特製の滑りやすく加工された油の入った、犀犬にしか出せぬ物。

それを避けるであろう位置を予測し、撒いておけば泡に気を取られていた鬼鮫は体制を崩す。ウタカタはその間を見逃さずに管からゼリー状の液体を出し、鬼鮫は身動き出来なくなってしまう。

(あの管便利だな…。)

「…降参です。」

本気を出してはいないとはいえ上忍を降参させるとは、と人柱力相手に手抜きをしないように気を引き締める。

「次、やぐら。」

「…ん。」

後ろに背負った緑の花がついた棒を構え、臨戦態勢を取る。

合図がなり、最初に動いたのは鬼鮫。

忍刀鮫肌を構えてやぐらに向けて振り上げて攻撃する。

「水遁・水鏡の術！」

黒い棍棒の前に水鏡が現れ、棍棒で割れば鬼鮫の分身が出てきて鬼鮫の攻撃を相殺。

手加減なしに勢いよく鮫肌を叩きつけた為、少しばかり隙が出来た。その隙に、やぐらはその隙に棍棒で鬼鮫の頭を殴りつけ、地面に叩き付ける。

その間2秒。

頭を容赦無く殴られていたが、大丈夫なのだろうか。

「はぁ…降参。次…レナ。」

「はい。」

連敗して少しやる気を無くしつつある事を隠さずに、頭から血を流しながらもレナと向き合う。

順番が回ってきたレナは、腕に薄く刻まれた紋章から大鎌を取り出し、構える。

演習場に、模擬戦開始の合図が鳴り響く。

第10話

鬼鮫は焦る。レナが持つ大鎌に見覚えがあり過ぎたから。

かつて忍界の死神と謳われ、敵味方両方に恐怖とトラウマを植え付けた赤髪の女が持っていた物。

その女性が参加した戦闘では、四肢を切り取って命は助かったものの人生が終わった人間や、男性の大切な「アレ」を切り落として一生男性が女性として暮らすハメになる人間が続出し、敵味方関係なしにトラウマを植え付けた。

その女性がどこからともなく取り出す赤い大鎌は、男性でも持つだけで苦慮する重さの筈なのに平然と振り回すのだ。

一時、うずまき一族赤鬼説も囁かれたほどだ。

その女性は出産の際に亡くなったと聞いていたが…。

その一瞬の考える隙が命取りだった。

レナは音を一切立てずに柄の方を鬼鮫の足に当て、鬼鮫はその大鎌の想像以上の重さに耐えきれず転んでしまう。

うずまき一族の女性は、強気で力が強い人が多いと聞く。

30kgは超えるであろう大鎌を細腕で表情も変えずに振り回す姿に、赤鬼説にも思わず納得してしまった。

「うぐっ…」

いつの間にか首筋に刃が当てられており、両手を上げる。

やぐらに殴られた頭の痛みや、大鎌が当たった足の痛みを堪えつつ、支持を出す。

「降参です。はあ…こんなに一方的に負けるとは思いませんでした。…明日から本格的な任務が開始します。

朝8時に第2演習場前集合。…レナに話があるのでレナ以外は解散っ！」

「いや、俺らも聞く。」

「…レナ、さっきの大鎌はどこへ？」

「うずまき一族に伝わる紋章で仕舞いましたよ。」

ほら、と見せてくれたのは、手首当たりに付いている赤い鎌の紋章。

少し鈍い光を放つそれは、昔に亡くなったあの人を突沸とさせた。

「…貴女は、うずまきアカリさんの娘、ですね。」

問いと言うよりも、再確認に近い。

よく見れば、瞳の色も同じで顔立ちも生き写しの様に似ている。

ならば、遺品をこの子が受け継いであれだけ使いこなせるのも領ける。

「…はい。」

鬼鮫は、帰路に付きながら考える。

敵味方関係無しに恐れられ、同時に尊敬？も集めたうずまき一族の人柱力は亡くなったが娘は愛用の大鎌を受け継ぎ、強く成長した。

出来ればトラウマ製造機とはなって欲しくないが、それは担当上忍である自分の役目であろう。

自分も歳を取ったと感傷に浸りつつ、新世代のこれからの成長を楽しむのもまた一興と足の痛みを堪えて一人暮らしの部屋へ戻った鬼鮫だった。

…足の痣が治るのに1カ月もかかり、やはりトラウマ製造機の血は争えないのかと挫けそうになったのは余談である。

第11話

「えー…次は、さつま芋の収穫手伝いです。」

下忍になり1週間。

人柱力3人とはいえ、新米下忍の仕事はどここの里でも変わらず、強いて違いを言えば私達3人からの不満は0であり、むしろ不満を抱き始めているのは担当上忍である鬼鮫の方であることだ。

「木遁・お手伝い君の術〜！」

…何かあればこの子に言っして下さいね。じゃあ、頑張って！」

依頼者の農家へと人形を貸し出し、本人達はのほほんと椅子に座っている。

『なあ、それ…そろそろ何とかなんねえ？』

「…戦闘が無ければ木遁なんてこんなもんよ。」

「いえ、血継限界である木遁をこんなに贅沢に使うのは…。」

「でも便利だし。」

「野菜とか美味しいな…」

「秘密基地とかも簡単に作る…」

「ああ、もう…これだからあなた達幼なじみは…！」

確かに木遁は他の血継限界とは違い、生きている物を出す、類希な能力ですが…いいですかっ！

木遁と言えば初代火影千手柱間が木の葉を導いた、とても強く素晴らしい能力ですよ!？」

長々と説明する鬼鮫ではあるが…私達の耳には半分も入ってきてはいなかった。

おじさんの長話ほど耳に入らない話は無いだ。

「だって素晴らしいのは千手柱間の人格であって木遁じゃないし…」

「…そう言えば、なんでレナは使えるんだ？」

最もな疑問をやぐらは投げつける。

「…うずまき一族が遠縁だからじゃね?とか言っただけ…なんでだろうね?」

「いや、俺に聞かれても。」

「それ、里の研究所の方でも同じ結論になりましたよ、はい。」
「先生、終わった。」

収穫が終わったと木遁人形から連絡が入り、鬼鮫に伝える。
…ちなみに、任務達成までの所要時間は15分であった。

Dランクの任務では、大抵こんな物である。

「先生、次は？」

「…もうありません。」

あのねえ…あなた達がDランク任務を総ナメにしちやってるせいで、他の班から苦情が来てるのですよ。

分かります？忍者成り立ての子から中忍、上忍がいくらやろうとも余りがちなDランクの任務が無くなる異常さが。

ねえ、聞いてます!?!これは由々しき事態だと…ああ、もう…!何でこんなに自由過ぎるんですか…!」

鬼鮫が長々と抗議の声をあげる中、3人はのほほんとカットされた桃を食べている。

ちなみに、もう受ける任務が無いと言われた時点でこの体勢である。

「あ、先生も食べます?」

差し出されたのは、木で出来た皿に切り分けられた桃。

「そう言うことではなく…。」

…食べますけど。」

この日、レナ産の果物・野菜のファンがまた1人増えた。

これは、木遁の新しい可能性の物語―。

第12話

「ふう…なんかやつと帰ってこれたって感じ…。」

「何だかんだでBランクの長期任務って疲れるな…。」

「…あんなに快適な野宿、初めて体験しましたがね。」

「やっぱり…木遁は野宿にて最強なんですね、先生。」

下忍になり、3ヶ月。

Dランク、Cランクの任務は総ナメにしてしまい、受注禁止令が出て活躍の場をBランク任務に変更して早1ヶ月の鬼鮫班。

今回の任務は、霧隠れの抜け忍の討伐。

移動時間を含めて1週間の長期任務であり、何事も無く成功。

一応、忍者歴3ヶ月のヒヨッコ忍者である。

「帰ってきて早々悪いのじゃが…鬼鮫班にAランク任務を言い渡す。」

「…Aランク任務!? 待って下さい、この子供がいかに優秀な人材だろうと、まだ12歳の子供…ヒヨッコ下忍です！」

Aランク任務は、里や国家レベルの動向に関する任務です。

まだ早すぎますっ！」

水影様の執務室へと呼び出され、言い渡されたのはAランク任務。

私達もいきなりそんな任務を言い渡されるとは思わず、固まってしまふ。

しかし、鬼鮫先生は動揺しながらも水影様に対して意見を言う。

「しかし、他に適格な者が居らん。…水影命令だ。」

「……はっ。」

その任務の内容はいかがな物でしょうか？」

「霧隠れのダルイ、シー、ビー、二位ユギトの4名との合同任務だ。」

霧隠れの抜け忍と霧隠れの抜け忍が共謀して雷の国にある、アジト近くの街道や村などを占領している。

全員が上忍クラスで人数は最低でも50名以上。

取り敢えず霧隠れに向かい、霧隠れの4名と合流せい。」

「「はっ！」」

「ねえ、二位ユギトって人とビーって人は人柱力何でしょ？」

雲隠れの人達だけで対処出来たんじゃ…」

「いいえ、上忍クラスが少なくとも50人以上…それだけ強くて多い抜け忍達を相手取るには、それなりに力を持った忍が必要です。」

抜け忍グループの上忍達の相手を出来る人間は同じ上忍ですが…里の上忍全員を抜け忍グループ討伐に当てる事も不可能でしょう。多くの忍を動かせば勘づかれて逃げられてしまいますから。

ですから、雲隠れの人柱力と霧隠れの人柱力五名と利き腕の上忍三名、少数精鋭を配備して抜け忍を確実に撲滅する事が大事なのでですよ。」

鱗粉雲の上で、会話する私達。

鱗粉雲に乗る度に半泣きになっていた男達も、Bランク任務をこなすうちに慣れて鱗粉雲の上はくつろぎの空間となった。

「雲隠れの皆様、第九班の小隊長、干柿鬼鮫です。」

よろしくお願いします。」

「雲隠れの上忍、ダルイツ。」

今回の任務ではダルイツすけど、一応リーダーとなっております。」

き、キン肉マン…！キン肉マンが日サロ行つたみたいになってる…

！

「雲隠れの上忍、シーだ。」

ダルイと共に雷影様の側近を務めている。」

シーさん、オーラからイケメンだな…イケメン特有の後光が差してる…。

愛想が無いのとクールなのは紙一重だよな…。

ただしイケメンに限るのルールはこの世界でも適用されそうだ。

「俺は雲隠れのキラビー。で、俺の中にあるのが八つつあん、牛鬼

だ。」

「…キラビーが普通に喋っている…だと…！」

見た目の怪しさは消えないが、普通に喋っているだけでド変態の不審者から、ごく普通の不審者にジョブチェンジ出来た感じだ。

「私は雲隠れの上忍、二位ユギト。」

「二尾、又旅の人柱力よ。」

素晴らしいメロンパンをお持ちのお姉さま。

「…私は発展途上だ。まだ小さくても大丈夫な…はず。」

「…貴方達も自分で自己紹介をしてくださいね。」

「ええ…」

「貴方達は人見知りか激しすぎます…！」

いつもいつも…幼なじみ同士は会話しなくとも分かるのかも知れませんが、中忍になれば常に鬼鮫班で任務に出られる訳では無いのですよ!?!」

「先生、長い。」

「…うう…もうヤダ…何だかんだで私よりも強いし…うう…もうさつさと自己紹介しやがれですよ…。」

「うずまきレナ。」

「…ウタカタ…」

「やぐら。」

『はあ…お前ら本当に必要最低限しか言わないのな。あ、俺はレナの尾獣、ラツキーセブンの重明だ』

『ウタカタの保護者、六尾の犀犬だ。』

先生さんや、無口でコミュ障なのはコイツらが出会った三歳から変わったとらん。諦めろ。』

『僕はやぐらの尾獣の、三尾の磯撫だよ。…先生、大丈夫？胃薬いる？』

「…さて、何故小さい尾獣が外に出ている？」

その年でもう和解しているのか？」

シーが私達にぐもつともなツツコミを入れる。

「ん、封印は私が解いたし…私達の保護者。」

「…そうか…取り敢えず、鬼鮫さんが再起動するのはいつになる？」
シーの目線の先には、しやがみこんでのの字を書いている鬼鮫先生。

チビ尾獣達の説得や慰めも虚しく、凹んでいる。

「鱗粉ドツカンの術！」

「ぬおっ！…と、取り乱してしまい申し訳ございません。」

鬼鮫先生の目の前で鱗粉を小爆発させると、ようやく再起動を始めた。

「随分荒治療つすね…。」

しみじみと言うダルイと、呆然とする三名。

ようやく任務へと動き出す一行であった。

第13話

「木遁・便利な小人さんの術！」

『もうツツコまねえぞ。』

新しいネーミングを放棄した事にはツツコまねえからな！」

重明のツツコミの最中に、私が空から見つけたアジトへ小人さん達が入っていく。

人を見かけたら、人形の振りをするようにと命令を出しておく。

「木遁は千手の血継限界では…。」

「この子、うずまきの子なんです。」

うずまきと千手は遠縁だから先祖返りではと言われていきます。」

「うずまき…ですか。」

「赤い髪、ゴキブリ並の生命力と莫大なチャクラ量、高度な封印術が特徴の一族ですね。」

うずまき一族は離散してしまつてあまり見かけませんが…。」

「先生、出来た。」

私が差し出した紙には、小人達が歩き回つて集めた情報を簡単に書いたものだ。

「ダルイさん、こちらです。」

…小人達は敵に見つかつては居ないようですね。」

「あ…了解つす。…じゃ、作戦会議を行います。」

「えー…アジトの出入り口は北のみ。」

つーことで、ツーマンセルで北以外の四方の壁を壊して抜け忍達を討伐しながら中心へ進んで行きます。

地図の丸印の所の壁が薄くなつていふとの事です。

アジトには、里から持ち出された禁術書や人体実験の資料があると見られますので、出来るだけ被害を出さないように。」

「ダルイ、ペアはもう決めたのか？」

「俺とレナさんは南、シーとウタカタは北、鬼鮫さんとビーさんは西、ユギトさんとやぐらくんは東だ。」

後質問ある人…無いなら散!」

「鱗粉ドツカーンの術!」

「レナさんって…いつもこんな感じっすか?」

『ああ、チビの時からこんな感じだ。』

「な、敵襲っ!」

音で気づいた10名程の抜け忍達は私達に一齐に飛びかかったものの、一瞬で大鎌の餌食となつて首と胴体が別れる。

『…上忍クラスって言っても連携もクソもねえな。』

4歳の時に来た暗殺者の方が強いぞ…。』

「…暗殺者、ですか…。」

ダルイさんは何か言いたげにしていたものの、忍者に集中する。

アジトを走り抜けて、30名程の抜け忍の集団とエンカウントする。

恐らく、中心部に来ると見越して待ち構えていたのだろう。

『水遁・水龍弾!』

「水遁・水鏡の術!」

一番前列の忍達が一齐に水龍弾を放つが、私が出した水鏡によって相殺される。

「雷遁・黒斑差!」

相殺された瞬間を見計らつて、ダルイが出した雷の黒豹が抜け忍達へ飛びかかった。

相殺された水遁を媒体に、雷は広がりを見せて一気に抜け忍達の意識を刈り取った。

アジトを順調に進み、全員が中心部で落ち合えたのは5分程後の事

であった。

第14話

「合同任務、ご苦労だった。」

…き、霧隠れの者達も、遠い所から…良く来たな…。い、今書類を書こう。」

どこか怯えたような雷影様は、私たちの—正確に言えば、私の—顔を見ずに言った。

「ボス、テンパリすぎてダルイので落ち着いてください。」

うずまきアカリさんは出産の際に亡くなっています。この子は娘さんではありませんが、本人ではありません。」

「そ、そうだな、そうだよな…生き返ったりしてない…よな？それにしても…そつくり過ぎてトラウマが刺激されたわ。」

…死神の娘が12になるか…俺も歳を取ったな。」

「…？」

「ボスは、貴女のお母様であるうずまきアカリさんに腹を捌かれた上、ピー！を半分ちぎられて女にされかけまして…大鎌も赤い髪もトラウマになっているんですよ…しかも、ダルイ事に半玉になってから恐怖でピー！が出来なくなっているんです。」

「あの時は後ろに般若が20は見えたぞ。」

人間では無く、悪魔と死神が合わさった存在なのかと本気で思った。」

お母さん…何してんだ…。

ガチムチな雷影に怯えられるって…。ピー！が何を指しているのかは敢えて聞かない。これ以上聞けば、雷影の男としての名誉にトドメを刺してしまう気がする。

「…だから死神って呼ばれたんですよ、貴女のお母様。」

「写真では普通だったのに…どんどん私の中でお母さん像が崩れて…。」

「大丈夫だ。刺激しなければ問題無かった。刺激すれば（精神的・社会的に）死ぬだけで。」

「私のお母さんは爆弾か何かですか…。」

「そう言えば…鬼鮫班の3人は一応下忍だったな…今度の木ノ葉での
合同中忍試験は参加するののか?」

「ええ、参加させますよ。書類も提出しましたし。」

「え、先生!?聞いてない!」

「そうだぞ、受けるのは俺らなのに!」

「…そもそも、俺らはまだ忍者に成り立てだぞ?」

「Dランク90回、Cランク20回、Bランク5回、Aランク1回。」

負傷0でこれだけの任務を行うのがペーパー?ふざけんですよ。

三ヶ月、たったの三ヶ月ですよ!」

上忍もびつくりの経歴、メンバー全員が人柱力とはいえ、私が事務
員であれば書き間違いを疑います。

それがまだ下忍?むしろまだ上忍では無かったのかと言いたい程
ですっ!下忍のまま上忍のような経歴を積んで…上忍のメンツが成
り立ちません!

さっさと中忍なんぞ飛び越えて上忍になりやがれですっ!」

一気に捲し立てた鬼鮫先生は、はあはあと肩で息をする。

先生も大変だな…誰のせいだろう、上忍である先生がこんなに苦勞
するなんて…その人は余程鬼畜なのだろう。

「そんなに受けてたっけ…」

「ええ、木遁ですぐに終わらせて次の任務へ向かったり、1日に何個も
任務を行うものだから…下忍になってからのお給金見なかったの
で
すか?」

私は急に増えたので驚きましたよ…。

だからD、Cランク任務受注禁止令がでるんですよ…。」

「…殆ど引き降ろしてないや。」

「俺も〜」

「俺も使わんな。」

「…殆ど木遁で終わらせる事が出来ますものね。そうでした。」

木遁は日常生活において最強でしたね。」

家の修理から、食品まで色々と使える木遁。敢えて言うならシャンプーなどの日用品位だろう。

水も水遁を使えば問題ないし…あれ…山奥で隠居しても快適に過ごせるな。

ちなみに、帰ってから確認してみれば3人共貯金残高が日本円にして1千万以上貯まっていた。

アカデミー入る前からこんな暮らしを続けていればそうなるのか…家賃も掛からないしな…。

第15話

「そーらを自由に飛びたいなっ♪」

「なんですか、その歌…中忍試験に参加しに行くと言うのに…気が抜けます…。」

「国民的な青タヌキの歌なのに…鬼鮫先生、知らないんですか？」

「…青タヌキ？」

水の国から火の国へと向かっている鱗粉雲。

鬼鮫が言うように、木ノ葉で行われる中忍試験に参加するために移動している最中であつた。

私がこんなに浮かれているのには、訳がある。

『鬼鮫、コイツの叔母が木ノ葉にいるのは知ってるだろ。…ついでに従兄弟も。』

母親を知らねえから、叔母を一目でも見るのを楽しみにしてんだ。』
「…クシナ様、でしたか。4代目の妻の…。」

うずまき一族の生き残りは各地に散らばってしまつて、血族を探すのも困難…一目と言わず、話すことも可能では？」

「同じうずまき一族つてだけで…話すことを望む程凶々しくは無い。…私は霧隠れの忍だからね。」

クシナ様が私の叔母だからと言って、向こうが私の事を知っているかはわからないし。火影夫人で雲の上の存在だから。」

「ここが…木ノ葉…。」

原作とほぼ同じ街並み。

豊かで繁栄している、五大国一の大国。

やぐらとウタカタも平静を装ってはいるが、目線がキョロキョロと動いている。

「試験が始まるのは明後日。修行しようにも、演習場は使えませんし…手札を明かす事になりそうですね。」

ということ、木ノ葉の観光でもしましょうか。」

「俺、火影岩に登ってみたい。」

「…貴方達が登ると全壊しそうなのでダメです。」

「やっぱり大人しく宿に行きましょう。」

「俺らはそこまで危険物じゃねえし…」

火影塔と呼ばれる、木ノ葉の根幹とも言える建物の一室。

執務室と掲げられた部屋の中には、金髪青目の見た目麗しい男性と、レナと同じ色をした髪の女性がいた。

男性の方は、いつものように書類整理など行っている。…が、いつもよりもテンポが悪いのは事実だ。

女性の方は言うまでもないだろう。

立って座って歩き回る。

普段から落ち着いている方では無いのだが、今日は1段とソワソワしている。

「火影様、失礼致します。」

「ん！入って。」

「は、ご報告致します。」

…霧隠れの受験者達が木ノ葉入り致しました。」

「あの子がっ！今すぐ会いに…」

「クシナ…落ち着いて。」

今日は疲れているだろうし…明日にすれば？」

「でも、姉さんの忘れ形見でナルトの従兄妹なのよ…今すぐ会いに行きたい…義兄さんもあの子が幼い頃に亡くなっただけで聞いたから…霧隠れで辛い思いをしていないか…」

今にも泣きそうな顔をして、クシナは訴える。

4代目…波風ミナトは、それに一つため息をついて、妥協案をだす。

「なら、今日の夕方に…そうだな、一楽にでも誘ってみよう。」

テーブル席の予約を7名分取っておこう。」

「さすがミナト！話がわかるってばね！」

レナ達へ一楽への誘いが来るのは、木ノ葉へ到着してから一時間後の事だった――

第16話

木ノ葉の暗部の手によって私達のいる宿へと届けられた、一通の手紙。

〃霧隠れ所属 鬼鮫小隊の皆様へ。

姪っ子とじやれあう為にラーメン一樂のテーブルを7席、午後6時半に予約致しました。

来て頂けたら幸いです。

波風ミナト うずまきクシナ 波風ナルト〃

「今日はラーメンで決まりか…タダ飯ほど美味しいもんは無いやな。」

「やぐら…他人事だと思つて…」

「…てへっ」

「可愛く言つてもダメっ！」

あざとい…あざと可愛いとはこの事か…！」

可愛すぎてイラついたので、やぐらのほっぺたを左右に伸ばす。

あ、意外とモチモチしてる…そう言えば、左ほっぺたの傷は3歳の頃から付いてたな…可愛いから良いけど。

「む…可愛い言うな…」

眉間に皺を寄せ、私のほっぺたを左右に伸ばし返してきたやぐら。

「やぐらは可愛い。プリチー系女…男子だし。」

「今…女つて…本音が出やがった。」

しかもプリチー系つてなんだよ！

俺立派な男だし！ちゃんとゾウさんも付いてるしっ！」

あ、猫がフーツて威嚇してるみたい…。

それに、ゾウさんつて…。

「お前ら何やってんだ…？」

部屋から出てきたのはウタカタだ。

荷物を片付け終わったらしい。

「ウタカタ…レナが俺を女つて間違えやがった。立派なゾウさんも付いてるのに…」

「…確かにやぐらのは意外と立派だな。

16cmはある。」

ウタカタの証言により、やぐらの性別は無事保証された。だが…

「私、女の子なんだけど？下ネタエ…」

「レナはDカツ…痛っ！」

「痛つてえ！なんで俺まで…！」

「セクハラ厳禁っ！このムツツリ共め！」

やぐらが冤罪を訴えるが、可愛く言おうとセクハラはセクハラである。

見た目の可愛さに騙されてはいけない。

1度と言わず何度も騙された私が言おう。

この子…自分の可愛さを自覚してやがる…！

と言うことでゾウさん蹴り上げの術を2人に繰り出す。

蹴り上げにより、下半身に大ダメージを負った2人。

だが、それ以上に自分の中の何か大切な物が無くなった気がしたというのは2人の弁だ。

…上司であるはずの鬼鮫が一楽の事を知ったのは、予約時間30分前の事であった。

「姉さん…やっぱり姉さんに似てるってばね…うう…」

一楽へ辿り着くと、赤毛玉…もとい、クシナさんが飛び込んできた。

「クシナ…レナちゃんが困ってるから…」

金髪青眼の男性—波風ミナトが、私に張り付いたクシナさんを剥がして席に座らせる。

…ついでに、私もクシナさんの横に座らせられた。

「さて…霧隠れからよく来たね。」

長旅で疲れているだろうとは思っただけ…」

「レナちゃんレナちゃんレナちゃん……………」

なんかハアハア言ってる…クシナさんってこんなキャラだっけ…
なんか怖い。

「母ちゃん、辞めろってばよ！恥ずかしいからっ！」

あれっ…ナルトの髪が原作と違う。

金髪に、所々赤毛が混じっている。

「あ、俺波風ナルト！」

母ちゃんの息子だから俺らは従兄妹だっばよっ！」

「私、うずまきレナ。」

あ、ダメだ…ナルト^{従兄妹}相手にも人見知りが発揮されている。

喉がセメントで固められたみたいな感覚…コミュ障の典型的な症状だ。

「レナちゃん…やつぱりそっくりだっばね。」

アカリ姉さんも、人見知りだったから…怒ると怖いけどね。」

「怒ると怖いのはさつき体感したな。」

…あれは痛かった。」

「俺は冤罪なのに…」

「セクハラ野郎のピー！は問答無用で蹴り潰すのは常識でしょう？」

「初めて聞いたってばよ、そんな物騒な常識…。」

恐怖の表情で前屈みになりながら言うナルトと、それに同意する男性陣。

クシナさんはニコニコしながら私に同意する。…恐らく、似たような事をしてきたのだろう。

ミナトさんの顔が引き攣っていた。

宿へと戻ったのは、8時を過ぎた頃であった。

クシナさんや、見た目の印象は変わっても中身は変わらなかったナルトの迫力に押されて少し疲れていたようで、私はすぐに眠りについた。

第17話

木ノ葉隠れの里 忍者学校アカデミーの一室では、受験者達が答案用紙に書き込む音が響いていた。

原作通り、第一試験はペーパーテストで、普通の下忍程度の知識では解けない問題だ。

解けない問題は鱗粉による第三の目でカンニングを行い、他の2人にも鱗粉を使って伝える。

開始から45分経ち、試験官の森乃ヒビキから最後の問題が出される。

「まず、この問題を出題する前に『受ける』か『受けない』かを選択してもらおう。

『受けない』を選択した場合、その者は勿論、班員は連帯責任として不合格だ。

次の試験まで待てばいい。

『受ける』を選択し、不正解だった場合…この先一生中忍試験の受験資格を剥奪する。

この事を踏まえ、選択するように。

受けない者は手を挙げろ。」

ブーイングが教室内から聞こえるが、森乃ヒビキは俺がルールだと堂々としている。

…まあ、あの2人ならこの問題の意味に気付くだろう。

続々と不合格になる者が出ていく中、ナルトが啖呵を斬る。

「ふざけんじゃねえ！俺は絶対諦めねえってばよ！」

「もし不合格となれば一生下忍のままだが…いいのか？」

「一生下忍だろうが…下忍のままでも俺は火影になってやるってばよ！」

！
しっかりと自分の言葉は曲げねえ…それが俺の忍道だ！」

「…分かった。」

ここに残った者達全員に…合格を言い渡す。」

受験者が騒ぐ中、丁寧に説明するヒビキ。窓が割れ、派手に登場し

たアンコに第二試験の会場へと連れられる。

概ね、原作通りに事が進んでいった。

「まず最初に、試験を受ける者には同意書にサインしてもらおう。

これから先、死人が出た場合同意書にサインしていなければ全ての責任が私にくるからな。

説明後、これにサインし班ごとに後ろの小屋に行き提出。

第二試験は極限のサバイバルをしよう。

その内容は、なんでもありの巻物争奪戦だ。」

アンコは、13チームに別れ、天と地が各班に配布され、二つを集めた、塔に辿り着いた班だけが合格と説明する。

そして時間制限は120時間、五日間の間に巻物を集めゴールしなければならぬ。

飲食の調達は森の中で、自給自足しながら巻物を奪い奪われぬよう常に警戒し、時間内に塔に向かわねばならない。

だが森には獰猛な生物や昆虫、植物が居る為負傷した場合、死もあり得る。

失格の判定は塔に辿り着けなかった者、班の行動不能、巻物の中身を見た班の三つ。

だが基本的にギブアップは無い。

そして最後のアドバイスを貰い、班ごとに集まり、各自誰が巻物を持つかの話を始める。

「レナ、巻物よろしく。」

「ん。」

やぐらから天の巻物を渡され、特別製のポーチに入れる。

時空間忍術と封印術を合わせ、無限収納：簡単に言えば四次元ポ

ケツトと化したポーチ。

中に入っている物は何となく分かるし、中の時間も止まるため何時でも温かい料理も食べられる上、中身を出せる人間を私、ウタカタ、やぐらに制限したため、防犯上も問題ない。

「本当に便利だよな…これ。」

「レナ1人居ればサバイバルなんか怖くないよな。」

ゲート前に立ち、作戦会議の内容を思い出す。

開始の合図が鳴った直後、ゲート前で2〜3チームの足止めと無力化をおこなって、巻物を強奪し、全て天だった場合は別の場所からスタートするであろう砂漠の我愛羅達のチームから奪う事になった。

何故我愛羅達かという点、第三試合の個人戦では強力なライバル—つまり人柱力は、いない方がいい為だ。

相手は1人だけ人柱力、こちらは3人共が人柱力。勝てない相手ではない。

九尾の人柱力であるナルトは…従兄妹だし、オートの絶対防御というめんどくさい力を持った我愛羅に退場してもらおう。

試験開始のチャイムが、会場に響く。

第18話

合図が鳴ると同時に、術を発動させる。

「木遁・草結びの術！」

『おお、お前にしてはまともな術名が出てきたぞー！』

なんか騒いでいる羽虫は放置し、鱗粉で全員の巻物を強奪する。

「さ、終わったから行きましょう。」

その場を立ち去り、残されたのは開始早々巻物を強奪された哀れな受験者達が草によって地面に括り付けられた姿のみであった。

「ダメね…全部外れ。」

「なら守鶴の人柱力から奪うか。」

「ん、最初からバージョン2の尾獣化で行った方が良いかもね。」

赤黒い皮膚のチャクラに覆われるバージョン2の尾獣化は、完全に顔が見えなくなるため、それを利用して顔を隠す。

木遁で我愛羅達の居場所を突き止め、向こうからは死角になる所でバージョン2の尾獣化した姿になると、我愛羅達も尾獣チャクラを感じたようだ。

我愛羅達はこちらに殺気を向けるが、あの日の暗殺者程では無い。私が大鎌と羽根で無数の風の刃を起こし、我愛羅が砂で防ぐ。

その隙にやぐらとウタカタ、2人の合成尾獣玉を3人に叩きつければ、避けてギリギリ直撃は免れたが衝撃波により3人は地面に叩きつけられてしまう。

その隙に木遁で3人の体を木に結び、瓢箪を鱗粉で塞いで砂を使用不可にする。

「…あ、当たりだ。よし、行こっか。」

その場を立ち去り、尾獣化を解くとやぐらが口を開く。

「なんか、あんまり…強くなかった。」

「…人柱力3人がかりだからな。尾獣玉も使ったし。所詮、一尾だしな…。」

鱗粉雲の上で好き勝手言っただけはいるが…相手が私達みたいな人柱
力で無ければ、砂の3人は絶対的強者である。

因みに、余った天の書は空からばらまいておいた。

試験開始後45分でゴールし、史上最速記録を打ち立てたのはいい
が…

「暇…」

「眠い…」

「ウンコ…：トイレ行ってくる。」

本来なら数日掛けて行う試験を1時間足らずで終わらせると、何も
する事が無いまま貸し与えられた塔の部屋のベッドで自堕落に過ご
すハメになっていた。

試験中、塔から出てはならないと説明されると3人で凹んでしまっ
た。

部屋は狭く、必要最低限の設備で修練場も無いため暇を持て余して
いた。

そんな中私は、無限収納のポーチから一冊の本を取り出して読み始
めた。

暇潰しには読書が一番だ。

“医療忍術の心得”と書かれた本を読み進める内に、時間は過ぎて
いった。

第19話

暇な待ち時間も終わり、第三試験―個人戦の予選が始まった。砂隠れの3人はおらず、代わりに私達がこの場にいる。

雲隠れや岩隠れ、霧隠れの里から出てきているのも原作と掛け離れている。

木ノ葉からは、ガイ班、アスマ班、紅班、そして…オビト班。

特に左目を失っている様子もなく、顔の右側も怪我はしていない。

つまり…どうということだってばよ…闇堕ち√無し?リンちゃんは何?ダラ先は!?

色々と考えている間に、最初の試合が始まった。

うずまきレナVS秋道チョウジ

どの道一族か…。

あの伝説的な一コマが、NARUTO一番の黒歴史と化しているあの一族だ。

羽根を出し、下に降りるとチョウジも降りてきた。

…顔に恐怖を張り付かせて。

まあ、羽根が出てきているし人柱力だし肩に尾獣を乗っけてるしね。

周りからも緊張が伝わってくる。恐らく予想以上に警戒されてる…。

「では、第一試合を開始します。…始めっ!」

「霧隠れの術!」

試合開始と共に霧隠れの術を通常よりチャクラを多めに消費して発動させる。

白眼や写輪眼にもある程度効果がある…はず。

持っていないから分からないが。

「(木遁・眠り粉)」

チョウジの四方八方から花が咲き、花粉が音もなく噴出される。

霧が晴れると、寝ているチョウジと1歩も動いていない私。

私は手札を晒さずに勝ったのである。しかも、これからチョウジは酷い花粉症に悩まされる事となるだろう。

：強く生きる、チヨウジ。

何も分かっていないギャラリー、何も見えず混乱する瞳術組、さすがだと目線を送る幼なじみ、もうヤダと滝のような涙を流す鬼鮫。色々とカオスであった。

やぐらはサスケ、ウタカタはネジと当たり、私と同じやり口で完封勝利をおさめ、その場に戦慄をもたらした。

霧隠れ

やぐら、ウタカタ、私

木ノ葉

ナルト、ヒナタ、シノ

岩隠れ

ダン

雲隠れ

エフ

ヒナタがネジと当たらなかった事で、予選突破を果たし、逆にサスケとネジが予選落ちなど原作崩壊がやばい。

砂隠れの3人の代わりに霧隠れの私達が絶望感を醸し出す役どころか…。

また、本戦では観戦の為に人柱力が勢揃いするらしい。

我愛羅、二位ユギト、やぐら、老紫、ハン、ウタカタ、うずまきレナ、キラビー、うずまきクシナ&波風ナルト。

原作では殆どがお亡くなりになってしまった人達である。

少なくとも：クシナとナルト、やぐらとウタカタは守りたいな。

第20話

本戦が始まる直前、会場の熱気は外にまで伝わっていた。

第一試合

日向ヒナタVSダン

第二試合

うずまきレナVS波風ナルト

第三試合

やぐらVSウタカタ

第四試合

油女シノVSエフ

クジの結果、やぐらとウタカタのやぐら班同士の対決や、私とナルトの従兄妹対決が決まった。

二戦続けて人柱力同士が戦うため、会場が崩壊しないか心配である。

第一試合、柔拳使いのヒナタと岩隠れの大男ダンの決着は簡単についた。

弱気そうなヒナタに油断したダンは、大きな体を生かし、パワーでヒナタを圧倒しているかの様に見えた。

だが、徐々に柔拳のダメージで動きが鈍っていき、最後は血を吐いて倒れてしまった。

勝ったヒナタは、かなり動揺を隠せないでいる。

「レナ、頑張れよ。」

「お前なら…やれるさ。」

「二人共…ありがとう。」

「第二試合、開始！」

審判の声が聞こえ、大鎌^{相棒}を取り出して攻撃を仕掛ける。

「飛斬！」

重明の力を借り、飛斬を何回か飛ばす。

ナルトは難なく交わり、手の上にチャクラの玉―螺旋丸を作る。

(影分身無しで…ミナトが生きてるから教えて貰えたのかな。)

ならば、飛雷神にも気をつける必要がある。

飛雷神に似た術は私も使えるが…。

羽根を出して空に回避し、印を結ぶ。

「多重鱗粉爆発分身の術！」

20の分身達がナルトへと攻撃を仕掛ける。

ナルトが螺旋丸を次々と作って攻撃すれば…ドツカアンと大きな音をたてて爆発した。

爆弾式の鱗粉分身だ。

ちなみに時限爆弾式もあり、5体混ぜてある。

1体爆発させれば、近くの分身が続けて爆発する。更に、私が任意で爆発させる事も出来る。

ナルトは…傷だらけではあるが、普通の人間であれば傷だらけでは済まないだろう。

「めちやくちやウザイってばよー！」

攻撃すれば爆発し、悩んで時間をかけても爆発し、爆発すれば近くの分身も爆発する。

遠距離攻撃がないナルトにはもってこいである。

つまり、爆発は芸術である。

『んな訳あるか…これじゃあただの爆弾魔だよ。』

ツッコミを貰った所で全ての分身が消えた。ナルトはボロボロで服も破れてどこかのシヨタコン蛇野郎に乱暴された後に見える。

『…やったのはお前だがな。』

「こまけえ事はいいんだよ。ま、スグに終わらせよう。

木遁・挿し木の術！」

殺す気は無いので千本のような細い物だ。

「な…も…、は？」

ナルトは驚きで固まっている。

そりやそうだ。木遁だもの。これほど初見殺しな物はない。

千本が刺さっていき、ナルトは戦闘不能になり、私が勝利した。
観客席のザワザワがやべえ…戻りづらい。

…助けて、重明えもん！

『いや、普通に戻れ。』

「あ、はい。」

「第三試合、開始！」

「ウタカタ…初戦でお前と当たるとはな。」

「…やぐら、勝った方がレナと戦う権利がある。勝たせてもらう。」

「こっちのセリフだっ！」

「やめて、私の為に争わないで…って言えばいいの？」

『お前の為じゃない、自分の為に戦ってるのが見えねえのか、って突っ込めばいいのか？』

「レナはどちらを応援しているんですか？」

はつきりいって戦いが高度すぎてどっちが押ししてるとかいまいち分からない域に達してるんですが…。」

「どっちも応援してるよ。幼なじみだもの。戦いはほぼ互角ね。」

特殊攻撃と回避が得意なウタカタと、物理攻撃が得意で防御がずば抜けているやぐら。

…決着は中々つかないかも。」

お互いに攻撃を仕掛ける度に、ドカンと音をたてて地面が抉れている。

『…最悪完全尾獣化からのダブルノックアウトも有り得るな。』

「ありそうね。」

「か、完全尾獣化…!?!」

元々青い鬼鮫先生の顔が更に青くなる。

いくらコントロールが出来るからと言っても、尾獣は怖いもの。

だから、安心させるように言う。

「もし暴走するような事になれば私が抑えるわ。

そうはならないから大丈夫よ。」

「そ、そうですね。他の人柱力の皆さんもいますしね。」

ほっとした様子の鬼鮫先生だが、未だに高速の戦いは続き、2人はバージョン2の尾獣化を済ませた所であった。

第21話

赤黒いフォルムのバージョン2の尾獣化した姿は、普通の人間からすれば恐怖の対象である尾獣に近い為、観客席からは声一つ上がっていない。

だが、冷静な人間なら分かるだろう。

2人が自由自在に尾獣化出来るという事に。

激突した2人だが、中々決着がつかない。

一般人：いや、上忍達でも戦いがどうなっているのか目で追うことが出来ずにいる。

『もうこれしか無い、か。』

『すぐに決着を決めるぞ！』

2人の姿は変わり、完全な尾獣へと変わる。

周りの影響も気にしたのか、本来の大きさよりもかなり抑えているが。

ざわつく観客席。

だが、理性は保てている事もあり逃げる人間はいなかった。

小さめとは言え、尾獣化した姿でやり合えばどうなるか。

既に審判は上へ退避しているが、会場はボロボロだ。

「先生、これって…次の試合出来るの？」

「…どうでしょう。」

決着がつく前に会場が全壊しそうだ。

キョロキョロと見渡し、五影や人柱力達がいる席を見遣ると、ハラハラしているようだ。

…ナルトもいる。

と言うより私達はあそこになくてもいいのだろうか？

人柱力10人分の席が用意されているようだ…。

「レ、レナさん…まだ決着がつかないのですか…そろそろ止めた方が…」

「確かにヤバそうね。」

会場は半壊だ。

審判に止めさせる事を言い、金剛封鎖により動きを止める。

「ストップ！会場がボロボロなので中止、両方負けと言う事で！」

『…。』

「返事は!?」

『はい!』

両方尾獣化を解き、不戦敗となった。

次の試合は油女シノVSエフなのだが…大丈夫なのだろうか？

三十分後、油女シノVSエフの試合が開始した。

…虫に驚いたエフが自爆、という結果で。

会場がボロボロのため、ここで試合は終了となった。

「全く…貴方達はゴニョゴニョ…いつも…」

怒っている鬼鮫先生と正座している私達。

予選は霧隠れで何があったのか分からず、本戦は会場を破壊しまくった私達をガミガミと怒っている鬼鮫先生は、周りが見えていない。

…付近に人柱力全員と五影がいることに。

「鬼鮫先生…」

「…言い訳は聞きませんよ！」

「鬼鮫先生、後ろ…」

「後ろ?…うわあっ！お、お見苦しいところを…」

「先生アワアワしてる〜」

「忍は周りをちやんと見ないと…」

「…先生って上忍だろ?」

三者三様のダメだしをすると、ムツキーと怒った鬼鮫先生はまた騒ぎ出す。

…が、私の金剛封鎖により黙らせて五影と人柱力全員を見遣ると、火影―波風ミナトが口を開く。

「ん、3人とも、とても素晴らしい試合だったよ。」

これから人柱力や五影の集まりがあるから付いてきてくれるかい

「？」

「はあ…」

取り敢えず封印を解き、鬼鮫先生を残したまま付いていった。

第22話

会議室で、私達は椅子に座る。

我愛羅の席から視線を感じる気がするが、きつと気の所為だ。

ナニモシテナイ：ナニモシラナイ。

現実逃避をしていると、声がかかる。

「第2の試験での『あれ』はお前らだったか。」

「あれ？何かあったのか？」

我愛羅の唐突の一言に、父の四代目風影が反応する。

「：第2の試験の初日、三人組の人柱力に巻物を取られた上縛られてな。尾獣化した上木遁まで使われたから手も足も出なかった。

砂も効かなかったからどこのどいつだと見ていたら：ナルトの従兄弟がいたのか。

3日目になって拘束が解かれたが、体力、気力共に消耗して試験を受ける所ではなかった。」

「俺ってばレナが木遁が使えた事に驚いたってばよ。」

「先祖帰りとは不思議な事もあるもので。」

我愛羅は特に私達をコロコロする気は無いようだ。

ナルトと五尾の人柱力、ハンがそれぞれ反応を示す中、雷影の様子がおかしい。

「大鎌コアイ：去勢ダメ、絶対：」

「ボスが壊れた：ダリイ：」

雷影の性格が原作とはエライ違いである。

どうしてこうなった、むしろどうすればこんなトラウマを植え付ける事が出来るのか。

ある意味お母さんを尊敬する。

：尊敬するだけで真似をしたいとは思えないし絶対に真似はしないと誓うが。

中忍試験に参加した人柱力達の結果が発表される。

「波風ナルトを中忍合格とします。」

…おめでとう、ナルト。」

「俺だけ？あの3人はどうなるんだってばよ。」

「いや、霧隠れの3名は中忍ではなく上忍だ。3人共おめでとう。」

「上忍…」

「つまり…」

「もつと働けて事か…」

3人の言葉にその場にいた全員がずっこける。

「ち、違う！お主らが本腰を入れて働くとはかの者が任務にありつけず食いっぱぐれるわ！」

むしろこれから暇で仕方なくなるぞ！」

「暇になるなら3人で修行でもするか。周りに被害が出ないところで。」

「レナに建物建てて貰えるし…かなり遠くまで行っても大丈夫そうだな。」

「水影様、尾獣化して本気で戦えるような広い所知りませんか？」

今まで以上に任務を受けようとする3人を必死に止める水影、それを聞いてマイペースに修行合宿の計画を立てる3人。

その日、確かに水影には同情の目線が注がれていた。

疲れた様子鬼鮫と水影の大人組と共に霧隠れへと帰り、日常へと戻る。

上忍になろうと、日々は変わらず…強いて言うならば任務のランクが上がった位で、殆ど変わらない日常を送っていた。

だが、それは突然訪れた。

「やぐら…もう一回言って？」

「俺…次代水影のトーナメントに出る。」

第23話

「俺…次代水影のトーナメントに出る。」

先日、3代目水影が引退の意向をまとめトーナメント大会を開催して優勝者に水影の座を譲る事を発表した。

それに、やぐらが出るとなれば…四代目水影はほぼ確実に人柱力であるやぐらとなる。

血霧の里フラグ再来？

「なんでまた…」

「俺、水影になって…お前らを守りたい。」

『…レナか。』

「…それも、ある。」

人柱力は影の近親者から選ばれる事が多い。だが、私達は全員孤児だ。

もしも新しい影が決まってその人が独身であれば、どんなに年齢が離れていようとも結婚させられる可能性がある。

私は今13歳。

あと数年経てば結婚出来る年だ。

自惚れる訳では無いが、顔もスタイルも良い方だろう。それを目当てに水影に…なんて人間もいるかもしれない。

最悪、木ノ葉に行けばいいが2人とは…会えないし守れないかもしれない。

だが、2人のどちらかが水影になれば…幼なじみという事でそんな心配も無くなる。

『本当にいいのか？』

「背負う物が多いぞ？」

「覚悟の上だ。」

短く答えたやぐらは目の奥に覚悟を灯しており、なんだか大きく…遠く見えた。

「そうですか…相手が可哀想ですね。」

俺が水影になると決めた事を伝えると、相手の冥福を祈り始めた鬼鮫を一発殴り、ウタカタと暮らしている家へと戻る。

幼なじみ達の為であれば鬼だろうと何だろうとなれる気がした。

ウタカタとレナの2人とは3歳からの付き合いだ。

ウタカタは人見知りで感情表現がヘタクソで誤解されやすい癖に寂しがり屋。

一定期間構われず放置されると死ぬのではと思うくらい、構わないと拗ねるのだ。うさぎの様な性格だ。

クールで端正な見た目とのギャップも相まって年上の女性にとっては大好物だろうが。

レナは大人びている癖に、無理に子供っぽく装って大人に心配かけまいとする優しい奴だ。

ふざけているように見えて、俺らを押しつけていってくれる。

俺らの中で精神的にも実力的にも一番強いのはレナだ。

今回の水影トーナメントは、美人のレナやイケメンのウタカタ、…不服ではあるが可愛いなどと言われる俺を狙う輩がいっぱい出てくるだろう。

俺らはいい。

男だから、男が水影になれば水影と結婚もクソもない。

例え女性になったとしても、2分の1の確率だし失うものは…童貞位だが、まあ…ダメーじは少ない。

だが、レナは違う。

独身の男がなればどんなに年上だろうと結婚するべきだと名前が拳がる。

人柱力の女はレナ一人。

そして、レナは相手がどんなに嫌な奴でも受け入れなければならないだろう。

失うものが大きすぎる。

そもそも、美人のウエディングドレス姿の横に醜男はダメだ。醜男

だと決まった訳では無いのだが。

俺らは幼なじみでチームメイトだ。

だから俺がなれば結婚を…なんて事にはならない、はず。

少なくとも、レナを相応しい人間に嫁がせる為に、ウタカタを理解してくれる女性に巡り合わせる為に、何よりも2人を守る為に、俺は水影だろうとなつてやると決めたのだ。

…恥ずかしいから言わないが。

第24話

あれから1週間。

トーナメントにやぐらが出る事になると、出場者は半分に減ったらしい。

当然、やぐらが勝ち進み、4代目水影となった。

水影となり、水影邸へと居を移したやぐら。

それに伴い、ウタカタとのシエアハウスは解消…とはならず、そのままウタカタも一緒に住む事となった。

ついでに、警備上の問題で私もうずまきの家から出る事になり、幼馴染みで住み始めた。

就任式も終わり、お風呂上がりにくつろぐ私達。

「やぐら、シヨタ影就任おめでとう。」

「シヨタ影なんかになった覚えは無いんだが。」

「シヨタ影、就任祝いになんか食いたいもんあるか？」

「だ・か・ら！俺は水影なの！」

全く2人して…」

頬を膨らませ、いじけるやぐらの頬を2人でつつく。

「だあつ！俺を子供扱いするなっ！」

そりゃ、ウタカタみたいに背が高い訳でもないし大人っぽく無いけど同年だぞ！

いくら小さいからって、俺だって大人だしイ！」

「可愛いから良いの。」

「…一応男なんだが。」

「知ってる。女の子よりも可愛い男だよね。」

「うう…ウタカタく俺、可愛いって…女よりも可愛いって…」

私がからかうと、ウタカタに泣きついたやぐら。

だが、そこにいるウタカタは慰めてくれるほど優しい性格ではない。い。

「良かったな、泣くほど嬉しかったのか。」

「違げーよ!？」

男に可愛いは褒め言葉じゃ無いしつ。

そもそも、レナの方が可愛いし美人だと思うぞ！」

今度は私が照れて赤くなる番だ。

自覚があるのと、他人に褒められるのでは違う。

だが、私もそこでただ赤くなる程可愛い性格はしていない。

「ふふん、そういう口説き文句は惚れた女に言うのよ。

やぐらの可愛さに落ちない子はいない…事も無いけど、大体落ちるから。」

「大体落ちるってなんだ、そこはお世辞でも落ちない子はいないって
言えよ…中途半端で逆に気になるぞ！」

「やぐら、レナに落ちて欲しいのか？」

ウタカタがからかうように言うのと、顔を赤くするやぐら。

…そういう所が可愛いしからかい甲斐があるんだよな。

「な…な…なな、何言ってるんだよ、ウタカタ！レナは幼馴染みだぞ！」

お、俺はそろそろ寝る！おやすみ！」

「おやすみ〜」

動揺しながら、紫の扉―やぐらと書かれた札が下げられている―に
入っていったやぐら。

「じゃ、私も寝よっかな。」

「俺も。」

私は赤色、ウタカタは青色の部屋にそれぞれ入っていった。

『レナ、顔が真っ赤…ぐべっ！』

「余計な事は言わないの。」

『…はい。』

一発殴れば大人しくなった重明。

重明も長い付き合いであるため、何を言えば拳が飛んでくるか大体
分かっているが、私と同じく他人をからかって反応を見るのが大好き

な重明は私をからかう事を辞めないだろう。

『え、なに？やぐらの事好きなの？』

「可愛い子に美人って言われると嬉しいだけよ。」

『そりゃあいつはそこら辺にいる女より可愛いけどよ…。』

でも、他の奴に言われても何も感じてねえだろ。』

「そこは、ほら…幼馴染みに言われると…ね？」

『…そんなモンか？』

「そんなモンよ。」

恐らく、ウタカタに美人と言われても照れて赤くなるだろう。

普段誰よりも近くににいる2人に褒められると、他の人に言われるより重みがある気がするのだ。

重明と話していると眠気が出始め、ベッドへと入った。

第25話

寝たと思ったら、真っ白な空間にいた。

重明と初めて会った精神世界にも似ているが、何かが違う。

前に進んでいくと、赤い髪の少女―うずまきレナがいた。

「もしかして…本来のレナ?」

「初めましてだね、〝レイカちゃん〟」

「…なんで…」

それ以上の言葉が出てこない。

毎日鏡で見ている顔だが、何故か私とは違うとわかる。

視界に入った私の髪は黒で、顔も前世のレイカのままなのだろう。

私がレナに代わり、本来のレナがどこへ行ったのかなどは考えないようにしていた。

私が殺したのか、レナが精神的に死んだから私が憑依したのかなど私が考えても答えは出ずに不安が溜まるためだ。

「レナ、どうしてここに…」

「私がレイカちゃんを呼んだの。」

「へ?」

「私が、人柱力としての苦しみに耐えられなくて…レイカちゃんに代わってもらった。」

「ずっと、見てきた。レイカちゃんが頑張って来た事。」

「ああ、なるほど。」

私が唐突に転生したのは、死んだ私と精神崩壊寸前のレナとの波長とタイミングが合った為だろう。

〝誰かに変わってほしい〟とレナが強く望んで、もっと生きていたかったと思った私がレナに憑依した。

「そっか。レナ、…ありがとう。」

「な…なんで…私は貴女を勝手に呼んで、死ぬかもしれない危険な日々を送らせた張本人なのにっ!」

「貴女が命を狙われる事も無かった…私が呼ばなければ、貴女は日本で転生出来た…!」

「でも、呼んでくれなければやぐらやウタカタに出会う事も無かった。だから、ありがとう。」

生まれてきてくれて…3歳まで生き抜いてくれて…ありがとう。」
そつと抱きしめると、泣き始めたレナ。

背中をさすり、落ち着くまで待つ。

「レイカちゃん、…レイカちゃんの魂のチャクラ性質は水、土、火…それから、木。」

私と一緒にいる事で、雷、風も使えるようになるの。」

「一緒にいるって…」

「私は真正正銘、レイカちゃんの中に入る。」

私の自我は消えるけれど、レイカちゃんの力として生き続ける。

これが、身勝手にレイカちゃんを呼んだ私が出来ることだから。」

「そんなんっ…！」

「レイカちゃん、ありがとう。」

これからも、頑張つて。」

レナの体が透けていく事を見ている事しか出来ない私。

消えていくレナは、穏やかな表情だ。

「…バイバイ、レイカちゃん。」

私の中に、暖かい物が流れてくる。

レナのチャクラ…本当に、消えてしまった。

そこで、私の意識も浮上するような感覚に陥る。

もうすぐ、目が覚める。

次に目を覚まして最初に目にしたのは、心配そうに覗き込むやぐらの顔だった。

第26話

「んん…やぐら？何で私の部屋に…」

レナが私の中に入った事でチャクラ量が増えたのか一瞬目が回るが、強引に体を起こす。

私の至極当然の間に、やぐらは目を泳がせて動揺している。

どうやら寝込みを襲いに来た訳では無さそうだ。

「あ…いや、あの…別に変な事を考えてた訳じゃなくて…えつと…その…レナが居なくなるんじゃないかって…胸騒ぎがして…気付いたらレナの部屋に…ごめん、勝手に入って。」

「別にいいけど…」

しどろもどろになっているやぐらが可愛いので、ポンポンと頭を撫でる。

その胸騒ぎも、あながち間違っではないだろう。

ふと窓から明け方の光が入り込んで部屋を照らし、やぐらの赤い頬を際立たせる。

「むう…どうせ可愛いとか思ってたんだろ。」

「うん、やぐらは可愛いよ。」

「…俺も一応男なんだからな。」

「？ん、そうだね。」

「絶対意味分かってねえ…。」

何故か落ち込み始めたやぐらだが、突然私の体を引き寄せた。

唇に、柔らかい物が当たる。

驚いて目を見開けば、やぐらの顔が至近距離で映る。

綺麗な顔してるな、と場違いな事が頭をよぎる。

少しだけ開かれた紫の目はアメジストみたいに透き通ってるし、アッシュの髪はハネがちだけどサラサラだし。

頬はマシユマロのようにモチフワで、左目から頬に掛けての傷も綺麗な顔のアクセントになっている。

唇が離れ、お互いの顔が至近距離で映される。

「やぐら…。」

「…美人で可愛いのに無防備すぎ。」

いくら幼馴染みだからって…いつまでもこんなに無防備だと、何時か襲うぞ?」

茶化して言っているが、やぐらの頬は赤い。

だけど、私の頬はそれ以上に赤いのだろう。

「さつきも言ったが俺も年頃の男なんだ。」

どれだけ可愛かろうと、な。

俺は…レナの事…いや、何でもない。

じゃ、部屋に戻るわ。」

逃げるようにやぐらが立ち去った部屋は、シンと静まり返る。

『…やり逃げか。』

「変な言い方しないでよね…。」

『間違つてねえだろ? キスのやり逃げじゃねえか。』

せっかくいい雰囲気で告白するチャンスだったのに…。」

「い、良い雰囲気…? 告白…? へ?」

『気付いてねえの?』

あいつ、やっとレナへの好意を自覚したぞ。

大分今更だがな。』

「好意…? う、うえっ!? 好意って…え?」

顔が熱い。

重明は人をおちよくる事が好きではあるが、嘘をつくような事はしない。

だから、今の言葉も…本当だ。

そんな事を言われたら、これからやぐらとどんな顔をして話せば良いのか分からない。

取り敢えず深呼吸で落ち着き、唇に指を寄せる。

幼馴染みと言うのもあったが、キスをされて嫌な思いはしなかった。

もしもウタカタに同じ事をされても、同じ様に思うのだろうか?

想像がつかないが…やぐらとのキスの温かさを思い出し、心臓が爆発しそうな程早まる。

私は：突然キスをされて惚れる程惚れっぽいのだろうか。

まさか：そんな筈はない：と思いたい。

心の整理をしているうちに、完全に朝を迎えた。まだ、どんな顔で会えば良いのかは答えは出ていない。

幼馴染みに当然キスをされたからドキドキしているんだと、自分の心を誤魔化す他無かった。

第27話

身だしなみを整えてからリビングへと出ると2人とも既に起きており、椅子に座っていた。

昨日の事があったため少しドキドキしながらも、2人に声をかける。

「…おはよう」

「レナ、おはよう。」

「おはよう…：リンゴくれ。」

ウタカタの遠慮無しに要求に、座ったままでは届きそうで届かない場所にリンゴを出して私はウタカタの隣に座る。

イチゴを出してヘタを取ってから木皿に盛り、やぐらに視線を向ける。

「やぐらは？」

「…俺も、イチゴ。」

私の皿と同じ量のイチゴを出し、ヘタを取ってから皿に盛ってやぐらの前に出すと、赤い顔で大事そうに受け取った。

リスのように頬を膨らませながら美味しそうに食べているが、顔の赤みは引いていない。

「レナ、やぐらと対応違いすぎだろ…」

横でリンゴを食べるウタカタが、不服だと言わんばかりにボソリと呟く。

「だって可愛さが違うし。」

「確かに可愛いが、そういう問題か？」

付き合いたての恋人みたいな雰囲気出してたが…」

その言葉に反応したのはやぐら。

今まで以上に顔を真っ赤にして、目を泳がせながらウタカタに反論する。

「な…：そういう関係じゃないし…：べ、別に好きとか言ってるしっ！」
『言っていないだけで好意はあるんだな？』

鎧のようになっていく為顔が見えないが、見えていたらニヤニヤと

笑みを浮かべていたであろう重明が面白がっている事を隠そうともせず、やぐらを揶揄う。

「か、揶揄うなによっ…揶揄うなよっ！」

『揶揄うなによ（笑）』

「くっ…憶えてるよ、この羽虫めっ！」

『ああ、お前がレナを好きって事と反論で噛んだ事、すっかり憶えてやるよ。』

「くっ…この虫野郎っ！」

地団駄を踏み、重明への怒りを踵にして拗ねたやぐらだが、完全にオモチャにされている。

「やぐら、本当にレナが大好きだな。」

アカデミーから…いや、一目惚れしたから3歳の時からの長い初恋だしな。」

こちらにもニヤニヤしながらオモチャにする気満々のウタカタ。

「な、ウタカタ…違うしっ！」

別にそういうんじゃないし…は、初恋とかじゃ…！」

「へえ、好きじゃねえんだ。」

レナが男連れてきたらどうすんだ？」

「え…ダ、ダメっ！」

男、ダメ、絶対！…やっ！」

やっ！…可愛い。

やぐらをウタカタがオモチャにしてそれにプンスカとやぐらが怒るのを可愛いと言いながら私が笑う。

そのサイクルを繰り返し、いつの間にか出会いから約10年も経っていた。

ウタカタと私は上忍になりやぐらは水影になって変わったことも多いが、変わらない事も多い。

…主にやぐらの可愛さとか、全員が人見知りだとか。

その後、やぐらのいじりは家を出るまで続いた。

やぐらが水影になり、私と鬼鮫とウタカタで任務に当たるようになった。

まあ、余程大きな任務の際に動くだけで普段はやぐらの護衛任務についているのだが。

やぐらも水影としての職務に慣れてほぼ定時に帰ることが出来ているのだから、中々優秀なのだろう。

「レナ、ブドウ頂戴：種抜きで。」

「あ、俺も。」

「ん、はい。」

会議が終わり、疲れたのかぐったりしながらブドウを要求してきたやぐらと、便乗してブドウを食べるウタカタ。

水影就任から約1年。

15になり、将来の為に婚約者を…という話が大きくなり、躲すのに神経を尖らせているのだ。

才能がある忍は、次世代の為に子供を作れという周りからの重圧がのしかかるのだ。

若くして水影になったやぐらは、余計にだ。

出来るだけ早く結婚し、多くの子供次世代を繋いでいく事を周りから求められていた。

だが、やぐらはそういった事に消極的であった。

…理由は分かっている。

好きな人私がいる為他の人を好きにはなれず、そんな状況で結婚なんてしたくないのだろう。

やぐらの好意に気付いてはいるが、本人から「告白」をされておらず、私から付き合おうと言える勇氣も無い。

私にとつても、頭が痛い問題だ。

やぐらがこの状況であれば、もうすぐ私達にもそんな話が回ってくるだろう。

特に、私はうずまき一族の末裔…一族の血と封印術を次世代に繋がないければならない。

「レナ〜…」

「ん？」

「可愛い…」

「ほ、褒めても果物しか出せないんだから…！」

頭を撫でられ私を可愛いと言うやぐら。

「…イチャつくなら2人きりでやってくんね？」

遠い目をしながら文句を言うウタカタは、既にブドウを食べ終わっていた。

「…イチャついてなんか…」

「いや、イチャついてやがる。」

お前の顔がだらしなく溶けていた。」

「…え、そこまで分かりやすかったのか!？」

「ああ。レナが大好きだって表情で語っていた。…さっさと告白しやがれチキン野郎。」

「チ、チキン野郎!？」

ギャーギャーワイワイと騒ぐ親友2人。

変わらないな…と思いつつ、完食したブドウの残骸と皿をしまう私だった。

第28話

「レ、レナ…あのさ、その…」

3人で家のリビングでのんびり過ごす時間。

ウタカタがお風呂に入り、2人きりになった途端ソワソワしはじめたやぐら。

何か言いたげに口を開いては閉じるということを繰り返していた。

「ん？」

「す、好きだ！

初めて見た時から、ずっと…レナが好きだった。」

やぐらは赤い顔を隠す様に、言い切った途端に顔を逸らした。…可愛い。

「やぐら、こっち向いて？」

「むう…可愛いって思ってたんだろ。」

「うん、やぐらは可愛いからね。」

やぐら…私もやぐらの事が好きだよ。…大好き。」

今度は私が赤い顔を隠す番だ。

りんごのような髪色と同じくらい真っ赤に染まった頬を見られないように、やぐらの胸元に顔を埋める。

「…可愛い。」

今度はやぐらが私に可愛いと言う番だった。

抱き締められ、耳にそつと唇を当てられる。…ピクンと体が跳ねたのはご愛嬌である。

顔を上げると、同じくらい顔の赤いやぐら。自然とキスをして、やぐらの可愛い顔を眺める。

「…イチャつくなら他でやってくれ。」

部屋ならベッドもあるだろ。」

「べ、ベッド!？」

な、な…な…まだ心の準備が…いや、そういう事じゃなくて、まだ付き合い始めたばかりで…」

「…やぐら、何ヤラシイ事を想像してるんだ。」

水影の仕事で疲れてるだろうからと心配していたが…レナでエロイ事考える余裕があるなら大丈夫だな。」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべるウタカタに、してやられたと目を泳がせるやぐら。

「レナのエロイ姿…な…そんなこと考えて無い…訳でもないけど、ウタカタが妙な言い方するから…！」

大体な、レナは無防備で胸がデカくて柔らかくていい匂いで…男ならぞうさんが反応するだろ!?

レナが近くににいるのに、そういう気分にならないほうがおかしいんだ!」

「ほう…本人の前で夜のネタにしていると堂々と口にするとは…チャレンジャーだな。」

いつも通りやぐらはウタカタに玩具にされている。

しまったとこちらをちらりと見遣るやぐらの表情は、少し不安げだった。

「他の女の子をネタにしちゃダメだから。」

やぐらがそういう事を考えるのは…私だけ、だよ?」

「…ウタカタ」

「明日は2人の予定は空けとくから安心しろ。」

阿吽の呼吸とはこの事だ。

あつという間にやぐらにお姫様抱っこをされ、やぐらの部屋に強制連行されていく。

「…へ…やぐら?」

「俺がそういう事を考えるのはレナだけに決まってるだろ?」

夜の間が終わらないかも。…レナ…好きだ。」

「え…あつ…ちよつ…やぐら…っ!」

「知らない天井…でも無いけど、まさか自分がここに寝るとは思わなかった。」

『朝チユンってやつだな。それにしてもアイツ…よくあれだけ出せるよな。』

まあ、確かに…川が出来るほどだったけど…。

目線を動かしてやぐらを探すが見当らない。

時計を見れば、もう既に10時を過ぎている事が分かる。ウタカタはやぐらの代理として書類整理をしているだろう。

『アイツならスツポンポンでトイレに行ってるぞ。お前もそろそろ服着ろ。』

アイツがまた発情するから。』

「発情言っなし…。」

身体を起こし、隅っこで小さくなっていた掛け布団で身体を隠した。

…逆に発情のスイッチを押すとも知らずに。